様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１２６１１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０５６８

研究課題名（和文）多文化社会におけるコミュニケーションとソーシャルネットワークの構築に関する研究

研究課題名（英文）Researches on communication and the construction of the social network in multicultural society

研究代表者
佐々木　泰子（SASAKI, Yasuko）

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：２０２５１６８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、新しいコミュニケーションツールであるＳＮＳを使った留学生と日本人のコミュニケーションの実態を明らかにし、多様な背景の人々の共生・協働に資するような日本語教育の提案を目指した。国内、海外でのＳＮＳの使用実態に関するアンケート調査からは、非対面コミュニケーションの多様化が確認され，それぞれのメディアの特性を生かしたコミュニケーションの実態が明らかにされた。さらに、コンピュータを介したコミュニケーションならではの特性とともに、留学生が母語と日本語を自由に行き来し、多言語話者としての言語資源を話し言葉と同様に「打ちことば」においても、言葉遊び的、戦略的に使用していることを示した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we observed the actual situation of communication between Japanese and foreign students by means of new SNS communication tools and discovered a novel insight into the Japanese language education helpful to the coexistence and cooperation of people from many different backgrounds. We carried out domestic and overseas questionnaires on the use of SNS and noticed that there is the clear diversification of non-face-to-face communication. We found that people selected the characteristics of each media according to the situation. Furthermore, we found foreign students made full use of their multilingual resources in line with useful attributes of the computer; they seemed to enjoy the game by changing the use of languages strategically from their mother tongue to Japanese or vice versa in both "typing word” and "spoken language”.

研究分野：日本語教育

キーワード：ＳＮＳ　非対面コミュニケーション　コミュニケーション　無料通話アプリケーション　グローバル化　多言語話者　ネットワーク　コードスイッチング

１．研究開始当初の背景

日本語母語話者と非母語話者の言語使用については、それぞれの母語話者同士、あるいは接触場面の会話場面の研究がほとんどであった。書き言葉、中でも近年急速に普及した SNS における非母語話者の言語使用についてはほとんど明らかにされていないのが現状である。

そこで、本研究では日本人大学生及び海外で日本語を学ぶ大学生、さらに国内の留学生を対象に、SNS の利用実態を明らかにし、そのうえで、SNS 上で日本語がどのように使用されているかを探ることによって、多言語・多文化環境における新たなコミュニケーションスタイルの解明を目指した。

２．研究の目的

本研究では以下の（１）～（５）の目的の達成を目指し、研究を行った。

（１）ソーシャルメディアによるコミュニケーションを有効化する条件はどのようなものかを明らかにする。

（２）留学生と日本人大学生の SNS 使用の実態を明らかにし、両者の共生を目指したコミュニケーション教育のための示唆を得る。

（３）日本人の大学生と社会人における非対面コミュニケーション手段の選択の実態を探る。

（４）日本語を学ぶアジア五か国（日本、中国、韓国、台湾、タイ）の大学生は母国ではインターネットを媒介とするどのようなメディアやアプリケーションを利用してコミュニケーションを行っているか、及び日本で学ぶ留学生はインターネットを媒介にしてどのようにコミュニケーションを行っているのか、またそれらに出身国による違いはあるのかを明らかにする。

（５）日本における留学生数の最も多い中国人留学生は、スマートフォンの無料通話アプリケーションである WeChat 及び LINE の中国語をベースにしたやり取りにおいて、どのように日本語を言語資源として活用しているのかについて、出現位置、出現する日本語の種類及び機能の観点から明らかにする。

３．研究の方法

上記「２．研究の目的」（１）～（５）に沿って、研究の方法を以下に述べる。

（１）メーリングリストに基づく複数のメンバー間の情報交換を、予め了解を得て「擬似ソーシャルメディア環境」として捉えて分析を行った。企画の中心となった 3 名（A さん、B さん、C さん）のやり取りのすべての発話を単位方略に基づいて分類した。

（２）選択式及び自由記述式のアンケート調査をインターネットによって行った。調査時期は 2013 年７月及び８月、調査対象者は、留学生 192 名、日本人大学生 236 名である。

（３）選択式及び自由記述式のアンケート調査をインターネットによって行った。調査時期は 2013 年７月及び８月で、調査対象者は、日本名大学生（18 歳～25 歳）236 名、うち男性 54 名、女性 182 名及び社会人、ここで社会人とは、学生ではなく、常勤非常勤に関わらず職業を持っている人とし、24 歳 8 名、25 歳～34 歳 18 名、35 歳～44 歳 42 名、45 歳～54 歳 58 名、55 歳以上 15 名の合計 141 名、うち男性 91 名、女性 50 名である。

（４）アジア五か国の日本語学習者（合計 913 名）に対しては、選択式及び自由記述式のアンケート調査を 2013 年 7 月～10 月にインターネットによって行った。一方、日本で学ぶ留学生（24 名）には、2014 年 5 月～7 月に一人 30 分～40 分の半構造化インタビューを実施した。主な質問内容は、利用アプリの種類、使い分けのルール、相手、目的、機器、時間、気をつけていることなどである。

（５）都内の大学院で学ぶ中国人留学生９名（女性６名、男性３名：年齢は 25 歳～33 歳）に 2014 年１月以降 10 月までに WeChat における母語をベースにしたやり取りで日本語が含まれるものについて、画面を保存したスクリーンショットの提供を依頼した。さらにログを見ながら「なぜそこで日本語を使ったか」についてインタビュー（５名）を行った。提供されたスクリーンショットは 142 で、そこに含まれる総発話数は 879、そのうち日本語を含む発話は 251 である。留学生は全員大学院進学前に日本能力試験１級または N1 に合格し、授業や課題はすべて日本語で参加しており、日本語レベルは超級と判断される。

４．研究成果

上記「２．研究の目的」「３．研究の方法」（１）～（５）に沿って、以下に研究の成果を述べる。

（１）初めはおよそあらゆる意味で（物理的にも社会的にも）離散的な存在として「フラットな関係」（安田 2012）にあった保護者たちの集団が擬似ソーシャルメディア環境の中で学校教育プロジェクトの実現プロセスに携わることによって、戦略的に適切な日本語使用を媒介とした価値合理的な「チーム」（Marschak & Radner 1972）を自生的に形成できたことから、ソーシャルメディアがネットワーク形成に重要な役割を果たし得ることを明らかにした。

（２）両者に共通する傾向として、多様な非対面コミュニケーションメディアを利用していること、それらには電話やメールなど従来のものに加えて、Facebook や LINE など最近急速に利用が伸びてきたもの、さらに留学生には出身国由来のメディアも利用されていることが明らかになった。中でも両者に利用の多い、Facebook 、LINE、Twitter では、それぞれのメディアの特性からくる利用傾向の共通点、相違点があること、具体的には、留学生は、日本国内の友人だけでなく母国の家族や友人とのコミュニケーションを重視し、その目的に便利な Facebook の利用

が多いのに対して、日本人大学生は留学生に比べて、やや情報開示への警戒心が強く、また仲間内のコミュニケーションを重視することによるLINEの使用が多いという結果が示された。以上から、両者の SNS 使用にはメディアの特性による使用傾向及び文化的背景からくる使用特性の違いが見られ、それらを指導に生かしていくことが必要とされることを明らかにした。

（3）日本人大学生の非対面コミュニケーションのスタイルには、インターネットやスマートフォンの普及という技術面のみならず、彼らのライフスタイルないし社会的ポジショニングなどが影響していると考えられることを指摘した。

（4）留学生は、異なる文化環境の下で生活しているというだけでなく、多様な文化環境が輻輳した世界で活動している。そこで彼らは、複数のコミュニティに同時に属し、制度的な制約を受けながら、個々人のハピネスの実現に向けて行動している。それは、まるでジンメルが言う「つながり」の中で、ホイジンガが唱える「ホモ・ルーデンス」としての行為を選択する存在であると言えよう。

本研究のコンテクストとの関連で言えば、留学生は、今日、複雑な文化環境の交点でスマホや PC にインストールした複数のアプリを使い分けて、彼らがこれまでに帰属してきた、またこれから帰属していこうとする社会の中で、他者との適切なコミュニケーションを図っていこうとしている。それは、単に彼らにとっての外部環境条件としての本国の制度（法的規制や慣習など）に則して行動していかなければならないということを意味するだけでなく、同時に彼ら自身の内部環境条件としてのハピネスの実現に向けた選択が行われることも意味している。

（5）Gumperz(1982)では、仲間内の言語(we-code)と他集団の言語(they-code)を分けているが、中国語と日本語の間を自由に行き来している本研究のデータを見る限り、言語を二項対立的には捉えられないことが示唆される。多言語話者にとって、自身の言語資源である複数の言語は、分離されたものではなく一続きのもの（Garcia 2009, Canagarajah 2009）として SNS においても意図的／戦略的に使用されていることを明らかにした。

また本研究において、これまでほとんど研究されてこなかった、話し言葉と書き言葉の中間に位置する「打ちことば」における中国人留学生の生活者としての日本語使用の実態の一端を示した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３　件）

１．佐々木泰子：「多様性の根源を問いなおす」『児童教育』25．13-17（2015）査読無

２．佐々木實雄：「チープトーク・マーケティング－統合マーケティングコミュニケーションの一視角－」『商学論叢』42．117-121(2015) 査読無

３．佐々木泰子：「SNS の利用実態から見た留学生のコミュニケーション・プラットフォーム」『お茶の水女子大学　人文科学研究』11．15-25(2015) 査読有 http://hdl.handle.net/10083/57288

〔学会発表〕（計　５　件）

１．佐々木泰子：“The New Trend of Languaging in ‘Multilingual’ Japan” Joint Seminar Maison Universitaire France Japon, JSPS Strasbourg (2015.4.20)

２．佐々木泰子「中国人留学生の無料通話アプリケーションに見られる日本語－スマートフォンでの WeChat と LINE に焦点をあててー」企画の中心となった３名（A さん、B さん、C さん）のやり取りのすべての発話を単位方略に基づいて分類した。社会言語科学会第 35 回大会，東京女子大学(2015.3.15)(社会言語科学会第 35 回大会発表論文集 148-151)

３．佐々木泰子・船戸はるな：「アジア五か国大学生の非対面コミュニケーションに関する一考察」シドニー日本語教育国際大会 2014，シドニー工科大学(2014.7.12)

４．佐々木泰子・船戸はるな・佐々木實雄：「日本語教育における非対面コミュニケーションの取り扱いに関する一考察」第 11 回対照言語行動学会，恵泉女学園大学(2013.11.23)

５．佐々木泰子・佐々木實雄：「保護者ネットワークにおける戦略的日本語使用」第 9 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム,香港城市大学(2012.11.24)

〔図書〕（計　１　件）

１．佐々木泰子・佐々木實雄：「保護者ネットワークにおける戦略的日本語使用」『日本語教育と日本研究における双方向アプローチの実践と可能性』619-630．ココ出版(2014)

６．研究組織

(1)研究代表者

佐々木泰子（SASAKI, Yasuko）お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：20251689

(2)研究分担者

楊虹(YANG, Hong) 鹿児島県立短期大学・文学科・准教授

研究者番号：20571607

辛昭静(SHIN, Sojong) 東京大学・大学院
情報学環・研究員
研究者番号：40597192
佐々木實雄（SASAKI, Mitsuo）日本大学・
商学部・教授
研究者番号：80129949